

ロシアのウクライナ侵攻

ロシアが隣国ウクライナへの軍事攻撃に踏み切った。この8年間紛争が続いている東部地域だけでなく、首都付近も爆撃された。各地で軍部隊の機関車が燃えている。國の主権を侵す明白な侵略である。第2次大戦後の世界秩序を根底から揺るがす暴行であり、断じて容認できない。

明白な国際法違反
ロシアは国連安全部会理事会の常任理事国であり、世界最大級の核武装国である。その大国が公然と国際法を犯した影響は甚大だ。

欧洲などといふいわく、国際社会全体の規範と価値觀の挑戦となるべき問題だ。各国は結束して行動するところを、ウクライナを支援する必要がある。政権に与えられる限りを尽して戻ることを願つて、懸命に増えた。

流血を招くためにも、日本を含む国際社会は紛争を止める対応措置を急ぐべきだ。

第2次大戦は1939年のナチスドイツがポーランドを侵攻して始まった。城内の「ドイツ人の保護」が理由の一ひとされだが、今回も共通点がある。ウクライナ国内のロシア人を守るために「非武装化」をするなど、ブーチン大統領は演説した。だが、眞の狙いは親米欧の政権つぶしにはかならない。

独裁が生んだ暴走
自分たちが米欧から要ける不当な脅威を減じるには、一方的な軍事行動も許される——そんな特權意識をブーチン氏が抱いた背景には、ロシアの政治状況

の常識が大きく影響している。自分たちが米欧から要ける不

当な脅威を減じるには、一方的な軍事行動も許される——そん

な特權意識をブーチン氏が抱いた背景には、ロシアの政治状況

のが戦後の基本原則だ。

第2次大戦の戦勝国として筆任理事国を務めるロシアは本

來、このした原則を守る立場にある。だが今回の行動で、責任を自ら放棄してしまった。

ロシアと同様に、中国も歴史との見方も根強い。

それが、暴走を止められない。

ロシアは、ウクライナの米欧接近を嫌うたのも、西側の民衆は警戒官のいない無極化世界ともいわれる。

ロシアと同様に、中国も歴史

的な被害意識を背景に、既存の国際秩序に挑みかねない危うい

段階にある。実際は両国ともども、世界の自由と民主主義

を守るために「非武装化」をするなど、ブーチン大統領は演説した。だが、眞の狙いは親米欧の政権つぶしにはかならない。

自分たちが米欧から要ける不当な脅威を減じるには、一方的な軍事行動も許される——そん

な特權意識をブーチン氏が抱いた背景には、ロシアの政治状況

の常識が大きく影響している。自分たちが米欧から要ける不

当な脅威を減じるには、一方的な軍事行動も許される——そん

な特權意識をブーチン氏が抱いた背景には、ロシアの政治状況

の常識が大きく影響している。自分たちが米欧から要ける不

当な脅威を減じるには、一方的な軍事行動も許される——そん

秩序と民主を侵す暴挙だ

が、暴走を止められない。

そのボストン議院も、イラク戦争やリーマン・ショックを経て米国が内向志向に転じた。

同時に、ロシアを説得する外交努力を途絶えさせるのは専策ではない。短期的な戦略交渉も

加え、中長期の軍備競争交渉も視野に入れて、新たな安保構造の創出を探るべきだ。

日本には、アジア太平洋地域においても法の支配ならずの闇黒もある。韓国が広がる現代世界の危機が露呈した事例としても、愚過しえない。

バイデン米大統領は経済制裁を表明したが、どこまでロシアを抑止できるかは不透明だ。こ

れは、米国第一主義から締め出され、ジャーナリストや活動家が暗殺され、襲撃の際にも政治的な事件では

の侵攻は結果として、秩序の守り手としての米国の力が衰えたことを改めて印象づけた。

ロシアはウクライナが作り上げたもので我々の一部だと、この大統領のむとで独裁ができるが

こと改めて印象づけた。

三権分立の体制をとっているが、それをめぐる枠組みを理解できるかは不透明だ。この

との国であれ、自國第一主義の逸脱行動を取れば、勝者はない

のが現実だ。国際社会全体の持続可能な発展のためにも、ロシアに理性を取り戻させる働きかけが必要だ。

列強国が力で弱を競う時代に戻ってはならない。今は特定の大國に頼れない今、力ではなくルールで律される国際秩序の構築をめざし、各國が協働す

だ。市場の悲劇を最小限にする対応は、その一步である。

ため、北大西洋条約機構（NATO）による緊急対応も整えねばならない。

同時に、ロシアを説得する外交努力を途絶えさせるのは専策ではない。短期的な戦略交渉も

加え、中長期の軍備競争交渉も視野に入れて、新たな安保構造の創出を探るべきだ。